

時事新報

明治廿七年九月十九日 水曜日

新規には専門語無な商店が多

の虞なからん事を欲し注意到らざる所なかりし一般市
民の奉迎準備亦これに劣らず御着装の兩三日前より毎
戸園旗を掲げ神靈を歸りたりも其當日に至りては更
に雄鷹を申し家毎に鞭幕を張り怡かゝる時節と同
るが如く一見忽ち質朴古風の民たると思はしむなり期
くて停車場の構内には特に二箇所の奉迎場を設け此内

表誠義金募集

近海に撤退して我軍向ふ所敵なしと雖も敵は世界無比の大國なり我國民の全力を盡して全局の必勝を今後に期せざるを得ず我海陸將卒の忠勇なる敵軍を攻撃する事より遺算なしと雖も家に在る全國の臣民は坐して我將卒の忠勇に依頼し以て安んずべきに非ず忠誠の一役我將校五名を失ひ下士卒負傷凡七十名、骨を萬里の異

(三)此基金は募集の上、當局者と熟識し最も適當の費
支に充てるものとす

本社資金の取扱方

今回本社大に資金を募集せんとするに就ては我國民の
義氣に富むる事に鑑ずる。資金の口數は定めて非常に多
かるべく亦た其金額も頗る大なるべし由て本社は特に
を設けて計算を正確にし且つ受取りたる資金は日々
第百拾九國立銀行。

に預け入れ之が保管を委託し以て計算保管の精確を期
す。

(此二款は百拾九國立銀行の業務と經て茲に掲ぐ)

馬匹の徵發

あるに非ず只日常の用事に聊々不便なるのみ是れり
よ／＼不便とあれば其人々の實力を以て更に馬を買入
るゝも易し或は車馬に換ふるに人力車を以てするも宜
し決して苦情なしのある可き筈なればいよ／＼必要
の場合には右の方法に據て遠慮なく實行せんみと我輩
の敢て當局者に希望する所なり

○廣嶋特報

大元帥陛下御着輦

九月十四日午後六時廣嶋に於て

特撰圖 足立 菅原

報道せし如く天皇陛下には本日午後五時二十分當市にて無事御着輦遊ばされたり數日前より當市の官民は奉迎の爲め必死の方と盡くし殊勵、警備の全力比一時、一切此點に注がれ御乗廻の道路を清掃しては圓鏡の進
行滑かならん事を欲し非常巡回を召集しては市中の取
締風がならん事を欲し又消防夫に命じては除雪火器

新報

廣 嶺 特 輯

九月十四日午後六時度量に於て

雜報

卷之三

大元帥陛下御着舊

既に電報を以て

の今日、大本營の牙籠薦

日大本腰の牙鷹葉

卷之三

四
一
九
四

終る思ふに東京の幸送と相對して近來無比の盛興なるべし。
文武官の拜謁、當地在留の陸海軍將校は御若筆後直ちに拜謁を許されて文様と佩び奉られたるよしなるが高臺文宮には明十六日午前九時に拜謁を許さるゝよし。徳宗宮殿下へ候候、有橋川總業吉殿下定の旅宿にて御着むるや當地高等文選官は車を拵せて御宿舎と候候したり。

九月十六日廣陽に於て

足立莊

卷之三

入る事を許されざるより一船の奉迎者は場外なる桜原通より京橋町、柳本町、上浅川町、練兵場の御道筋に充満し輕幕を張りなる車の軒下に席を敷きて其上に列座し恭しく儀禮を行ひ中には先祖傳來の金屏風を室内に立て詰め其前に畏まりて拜迎せし家もむり又陛下廣島に御臨幸と聞きて諸里は愚か數十里を隔てたる村山里より應ざり出で來りしものも詭ながらす是等は皆な陛下の御運筆わからし後までも列を亂さず余等間に奉迎と終りて停車場より歸るとき侍は未だ兩側に並列して中央を車行する人を凝視し中に田舎の老翁と覺ばしき一人は車上通行の人毎に顔面したれど是等は東京邊にては到底見るを得ざるの状況なる可し行在所へ御入御斯くて陛下は京橋筋より練兵場を経て元第五師団司令部なる行在所檻上に入御わらせられたり時に百一晝の祝禮大空に響き渡りて當日の奉迎を

次に徳大寺侍従長御陪乗し奉り陛下には龍頭珠の外院はしく歎迎の人々と左右に御観遊はされ鳳閣の御上り御下り御進みあらせらる其次には侍従武官乘馬にて扈從し奉り次に有栖川親王宮の馬車次に宮内大臣侍従の馬車、次に本縣知事、次に警部二名各々乗馬にて警衛し列外には大山陸軍大臣、西郷源蔵大臣馬車にて隨行した